

2009 年 東洋英和女学院 全学院クリスマス礼拝説教

2009 年 12 月 4 日（金）

小学部講堂にて

「福音の告知」

聖書：ローマの信徒への手紙 1 章 1～7 節

日本基督教団新津田沼教会牧師

中高部聖書科非常勤牧師

眞嶋 威牧師

待降節を迎えまして、皆様と共にクリスマスの礼拝を捧げます幸いを主に感謝いたします。クリスマスを迎える時にいつも覚えていることは、教会暦です。待降節に入ってからクリスマスを待ち望む時として、降誕を待ち望む時としてこの時を迎えます。聖書科で教えられているかと思いますが、教会には教会暦という暦がございます。教派などによってイースターなどの日が違うこともありますが、日本基督教団の教会暦で申しますならば、クリスマス・降誕日から遡って 4 つの主の日、日曜日を待降節といたします。さらに 5 つの主の日、日曜日をさかのぼって、待降節を含めて、教団では降誕前節という言い方をしております。その降誕日から数えて 9 つ目の主の日から教会暦の暦の 1 年が始まります。そしてそこから始まって降誕前節の前の主の日までの 1 年間で、神様の歴史のご支配を覚えて、1 年を過ごします。

降誕前第 9 主日から始まる 1 年間、それは天地創造を覚える主の日から始まります。そして一年間の中で、クリスマスを覚えます。クリスマスまでの間は主に旧約聖書の御言葉に聴いて、旧約の歴史に示されています神様の御心に聴きます。ですから創造から始まって、次に墮落と続き、主の日のテーマが一つ一つ進んでいきます。そのクリスマスを経てイエス様が伝道してくださったことを覚える時を過ごし、続いてイエス様が十字架におかかりになる受難日、イースター・復活日を覚え、さらにはペンテコステを経て、教会がどのように形成され伝道がなされるかということを経験します。教会暦の 1 年の最後には終わりの日を待ち望むことを覚え、この視野を持って御言葉を与えられ 1 年間を終わります。ということは毎年、天地創造から再臨の日、終末までを覚えて教会は歩んでいるということになります。わたしたちがクリスマスをお祝いするということは天地創造から終末までの神様の救いのご支配を覚え、主の日を過ごし、また日々を過ごすということでもあります。

待降節はイエス様がこの世に来てくださったことの意味を覚える時であります。つまりわたしたちの罪を贖ってくださるために来てくださった、そのことを覚えます時でありますから、その時を象徴するいわゆる典礼色は悔い改めを象徴する紫です。教会によっては紫のろうそくを立てるといふこともなされています。戦前にも紫のろうそ

くを立てる教会もあったと聞いております。ろうそくの色は象徴的にその意味を認めればよろしいことだと思います。わたしたちはクリスマスを、神様の救いの歴史のご支配を覚えることとして、待降節を過ごし、この降誕日を待つということです。さらにわたしたちはクリスマスだけではなくてそこでイエス様がなしてくださったことの意味を覚えてその時を覚えるわけです。今日与えられました御言葉は、その意味ではクリスマスの出来事を示しながら、救いの歴史のご支配をさらに広い視野で語っていることができるかと思います。

今日与えられました御言葉は日本基督教団の聖書日課におきましては待降節第4主日、つまり降誕日の直前の主の日の新約聖書の使徒書の御言葉として定められた箇所です。今日のこの御言葉はローマの信徒へパウロが記した手紙の挨拶の箇所です。パウロが自分はどのような者であるかということを語りながら、その語る際に自分が伝えるように示されたその福音について要約を語っています。ローマの信徒の手紙1章1節以下をもう一度お読みしたいと思います。「キリスト・イエスの僕、神の福音のために選び出され、召されて使徒となったパウロ」と始まります。この手紙に記したパウロがキリスト、メシアすなわち救い主であるイエス様の僕であるということを言い表しています。そのキリスト・イエス様がもたらしてくださったことを神の福音であると言い表しています。イエス様が来てくださった、そしてわたしたちはその僕とされた、これを喜びのこととして受けとめています。僕、これは文字通り奴隷という言葉が使われています。なぜ奴隷として生きることが喜びなのか。これはイザヤ書に記されています主の僕の歌、苦難の僕の御言葉によって理解がいただけるかと思います。代表的なところとしてはイザヤ書52章13節から53章の終わりまで、そこには私たちの罪・罰を負って下さる苦難の僕、主の僕の姿が描かれています。それこそイエス様、救い主の姿であることが示されている。教会はそのように信じています。つまりわたしたちが一方的に神様にそうしなさいと言われているのではなくて、御子、救い主イエスこそ、まず僕としてわたしたちの代わりに苦難を負ってくださり、罰を受けてくださった。そのことによってわたしたちに罪の赦しを与えられた。このことを信じたわけですから、わたしたちは感謝して、その救い主イエス様に従っていくことを喜びとして、キリスト・イエスの僕と言い表すことができたのです。そして自分が伝道するために用いられたことは選び出されたことであり、召されたことなのだ。パウロはさまざまなことに優れていた人物であって、律法学者ガマリエルの下に指導を受け、誰よりも律法に精通していて、律法の教えに従っていた者です。しかしそのような自分の能力ではなくて、唯々、神様がこのわたしを赦し、用いてくださった、ということです。キリスト者を迫害しようとしていたパウロが、ダマスコ途上で主の声を聞いて、イエス様こそ救い主である、復活の主にお会いして、自分が迫害していたキリスト者こそ神様に従う者であるということを知らされて、そういう大罪を犯していたこのわたしが赦されて、生かされている。神様の尊い御心に用いられている、召

されたことが恵みだと信じて感謝して、使徒とされたと言います。この使徒パウロが宣べ伝える福音について、2節以下に書かれています。2節「この福音は、神が既に聖書の中で預言者を通して約束されたもので」…旧約聖書では律法と預言者という言い方をしますが、後で律法について論じますから、ここでは預言者についてと言いますが、旧約聖書に約束されていたことであり、そしてイザヤ書などで喜びの知らせといわれています、その喜びの知らせ・福音は御子に関するものだ、とはっきりと言い切るのです。かつて律法を守ることに集中していたパウロが、その預言者が指し示す救い主がイエス様であるということを受けとめることができたのです。

その御子の福音について語られている箇所が、クリスマスの出来事を語っています。「肉によればダビデの子孫から生まれ」、今日与えられました御言葉の中で直接クリスマスに該当する箇所はこの箇所だけでありましょう。「肉によれば…生まれ」ということは、人間としてお生まれになったということです。神様であられる方が真実に肉をもって、人間となってわたしたちのところに来てくださった。罪を犯さない方だけれども、代わりに罰を受けるお方として、来てくださった。そしてそれはダビデの子孫から、つまり、エッサイの株から一つの芽が萌えいで、とイザヤ書にあり、預言者を通して神様が約束されましたように、救い主がこの世に来てくださったということなのです。教会暦で神様の救いの御支配を思い起こすことを申しましたが、このことは4節でこのように言い表されます。「聖なる霊によれば、死者の中から復活によって力ある神の子と定められたのです。」イエス様が来てくださったことの恵みを、この世に来てくださったということ、つまり教会暦で言いますところのクリスマスということだけを言うのではなくて、死者の中からの復活、つまり十字架の上で死んでくださった、罰を受けてくださった、このことが恵みであり、そして確実に死なれたその方が復活されたことを聖なる霊によってはっきりと知ることが許された、理解して受け入れることができるようにされたと言います。「力ある神の子と定められた」とあります。イエス様のお姿は、力ある方だったのでしょうか？ 主の僕、苦難の僕と預言されていたお方であります。力弱く、あたかも人々の力によって抹殺されたかのように見えるお方、そのように弱い、苦しまれたお方です。しかしそのお方はご自分に力がなくて弱かったのではなくて、すべてを受けとめてくださる方だった。人の罪深さという弱さをすべて受けとめてくださる、代わりに罰を受けてくださる、わたしたちが苦しまなければならない苦しみを一身に負ってくださる。そしてその方が復活をされた、神様のみ力によって復活された、その恵みをいただいた時、復活された時、そこには真実の神様の力が溢れていることでありましょう。力ある神によって定められたとありますが、これは聖霊によってそのように理解することができるようにされたと考えるべきことだと思います。力ない者だと思っていたのに、真実に力あるお方が十字架にかかってくださった。その方が復活して天に昇られたのです。ここでははっきりと力あると言われていることは、それほどまでに驚くべき出来事が起こっ

たということです。今日のわたしたちの科学・技術が発展している時代だから信じられないということではなくて、二千年の昔から起こり得ないことがそこに起こったと受け止められています。そのことは捉えきれない、理解しがたい出来事であるけれども、しかし現実には起こった。その大きな驚きが喜びに変えられて受けとめることができるようにされた。それは聖霊である神様がわたしたちにそのことを理解できるようにしてくださったということなのです。そしてこの方こそわたしたちの主イエス・キリスト。旧約聖書に書かれている父なる神様が主なる神様であり、イエス様がその方と等しいお方だということが言われているのです。「わたしたちはこの方により、その御名を広めてすべての異邦人を信仰による従順へと導くために、恵みを受けて使徒とされました。」ここで言っている「わたしたち」というのは何よりもパウロを指します。自分のことも含め、このことを皆が受けとめてくれることを期待して「わたしたち」と書いています。わたしたちがこの方によって御名を広める、恵みを広める使徒となりました。迫害者から伝道者へ変えられていった。その恵みをこのわたしもいただいた。

御言葉にそって聴いてまいりました。毎年繰り返し与えられるクリスマスのメッセージでありましょう。そして世界の救いの歴史の御支配の中にあつてこの出来事が起こり、終末を迎えるその時まで、この出来事を繰り返し繰り返し覚えていく。それはその時、クリスマスの出来事から終末まで来る、その間に生きるすべての人にこの救いが与えられているのです。ここにいるこのわたしたちにも、エルサレムから遠くはなれた極東の地であるこの所にも、この救いが伝えられた。この恵みがわたしたちにも与えられている、このことを覚えてわたしたちはこの時を喜びの時と覚えて過ごしている。悔い改めを待って待降節を過ごします。罪の赦しのためにイエス様は来てくださった、そのことを受けとめながら、しかしその罪がすべて赦されてわたしが生きることが願われている。何よりもこのわたしが愛されている。選り出されて召されたパウロであり、伝道者であり、そしてまた一人ひとりのキリスト者であり、まだイエスを信じていないすべての人々に、この救いが伝えられていく。そのためにクリスマスが毎年祝われているのではないのでしょうか。

学校で生徒達を見ておりますと、それぞれ勉強にがんばっていますが、自分があそこまでがんばっていなかったのであまり厳しく指導ができない者であります。わたし自身も神の恵みを受けている、召されていることを受けとめることができたのは、やはりこんなわたしでさえも神様が愛してくださっていると真に受けとめられたからだと思います。3年前の中高部の夏期修養会でお話させていただいたことですが、わたし自身は非常な劣等感で苦しんでおりました。わたしの母方の祖父は旧制一高・帝大(東大)の首席卒業の金時計組、そして、理学博士です。そのことを学校で母が話すのです。でも学校にいるわたしはその祖父とはかけ離れていましたから、劣等感に打ちひしがれていました。しかしそんなわたしです。祖父の学校にはもちろん入れませ

んでしたが、あるマンモス大学に入って、学校の教師も少しは経験して、そして、伝道者として召されました。こんなわたしでさえも用いられているということです。わたしは祖父の学歴を40歳くらいまで人に話せませんでした。長く苦しんでいたというのが現実ですが、今その苦しみがあったからこそ、受けとめられることがあると思います。つまり学歴とか学力とかそういうことで神様は差別なさらない。同じく愛してくださっている。与えられた賜物の違いで、神様の御前にあって比べられるものではないということを経験しています。学校の生徒にはまだ話をしたことがないのですが、今わたしが劣等感に耐えられないのではないかと人から推測されることがあります。大学の先生がここにもおられるかと思いますが、妻は大学教授であり、妻の弟も大学教授であるということです。わたしのことを「奥さんが大学教授でよく平気でいられるなあ」と言う人がいるのですね。でも、それは(東大ではなくて)地方の元・国立大学(現・独立行政法人)大学の教授だからどうこうではなくて、やはり、それぞれの能力が神様から与えられた賜物として祝福されているということを受けとめられるから、妻の能力と比べないで、自分を卑下しないで、神様にあって祝福されたひとつの夫婦として受けとめられているのではないかと思います。本当に一人一人が神様の祝福の中で真実に生かされていること。それはよいところも悪いところも含めて、神様がすべてを受け入れ愛して、一人一人を用いてくださる。そのことを受けとめられるということが、神様の救いを受けとめられるということの証しの一面なのだと思います。お一人お一人が神様からの恵みを生かして生きる、その命をもって喜んで生きるということ、そして与えられた賜物を喜んで、神様の栄光を表す器として、お一人お一人が用いられる。これが真実に幸いなことではないかと思います。神様の恵みを喜び祝う時に、このようなことをわたしは祈りながら考え、皆様と御言葉を分かち合いたいと願ったのであります。